

沈黙に学ぶ

高橋 睦郎*

我が国の文学史の中心は歌

わが国の文学史の中心になるのは歌です。もう一つ、漢詩がありますが、基本的には歌と申してよろしいでしょう。その内容は「恋」です。ただし始原は人間どうしの恋ではなく、人間の神への恋だったと思われま

す。古来、『古事記』上巻神代巻に出る「やくもたつ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」が、わが国最初の歌ということになっていますが、音数律の上では五七五七七で、完璧な短歌詩型。もちろん、後に整えられたものです。しかし、それが歌の始まりだと言いつたことになってきます。これはスサノオノミコトの妻のクシナダヒメとの神婚の歌ということになっています。クシナダヒメは神の妻、つまりは巫女です。神は自ら語ることなく、巫女の口を借りて語るにすぎませんから、神の巫女への恋の歌とは実は翻って巫女の神への恋の歌に他なりません。

その後、大陸から暦が入ってきて、万葉時代、神への恋は「自然への恋」と「人への恋」に分裂します。『万葉集』の部立でいえば、雑歌と相聞です。やがて勅撰集時代に入り、自然への恋は季歌、人への恋はその名のおり恋歌になります。文学史の上で重要なのは、どちらかといえば季歌のほうで、『古今集』でいえば季歌が先に出て、巻第一から巻第六まで六巻。恋歌は巻第十一巻から巻第十五まで五巻。これは基本的に二十一

代集（『古今集』以下の二十一の勅撰集）すべてに踏襲されて、連歌時代に受け継がれ、連歌の第一句、つまり発句にはその季節の季のこたばを入れなければならないという規則を生み、連歌の中から俳諧連歌が生まれ、季の重視は俳諧連歌からさらに俳句に踏襲されます。

現在も俳句には季語というものがあります。もちろん季のない無季俳句もありますが、季があるということがスタンダードになっているから無季という言いかたがあるわけで、そういう意味で季は俳句のきわめて大事な要素と申せましょう。

最短、最終定型の俳句の誕生

ところで、短歌と俳句の関係ですが、短歌が五七五七七で、俳句が五七五だから、俳句は短歌の上の句が独立したものと考えられがちですが、これは正確に言うと短絡です。和歌には長歌と短歌があるわけですが、途中から和歌といえは短歌になります。この和歌の決まりきった五七五七七という詩型が磨かれ、『新古今集』で技巧の極限まで行ったとき、ある意味で歌のポテンシャルな力を使い果たしてしまいます。そうすると、面白がなくなり、連歌時代が始まるわけです。

連歌は要するに連歌^{つらねうた}です。連歌は和歌の上の句と下の句の、つまり五七五と七七の呼応から生まれたのは事実ですが、それは短連歌です。五七五七七の七七にまた五七五をつけ、また七七をつけるという長連歌が生まれると、遊び、闘技として面白いので、そちらが盛んになります、

*詩人、俳人、歌人

長連歌も内容的にはほとんど和歌と選ぶところがない雅びな世界ですのでだんだん飽きられて、世俗の世界を嫌わずに取り入れる俳諧連歌のほうに興味に移り、こちらの方が中心になります。

俳諧連歌にはいろいろな長さのものがああります。五七五、七七、五七五……と五十連続くのが五十韻、百連続くのが百韻、千連続くのは十百韻と言います。世吉といって四十四句続くのもあります。しかし、三十六連続く「歌仙」が長過ぎず短過ぎないことから、いつか、スタンダードになります。

俳諧連歌の場合も第一句の五七五の発句をもとにして歌仙を作るのが建前だったのですが、芭蕉のころからだんだんと発句を作ること自体が中心になっていきます。明治になって正岡子規が登場して、俳諧連歌の歌仙の発句を、第二句の脇句から一番最後の挙句までの三十五句から切り離しましたが、これは画期的なことでした。俳句という五七五の最短定型が正確にはそのときに誕生するからです。

俳句の五七五は日本の詩歌の最短定型であるとともに、恐らく最終定型です。ここからさらに五七とか七五とかの短詩型が出来るということはまずあり得ない。のち種田山頭火、尾崎放哉たちの自由律が出現しますが、それをなぜ自由律俳句と言わなければいけないのか。短詩と言うべきではないか。俳句的な内容ではあるけれども、俳句と言わなければいけない理由の一つもないと僕は思います。それは文学的評価とは別のことで、僕は山頭火も放哉も高く評価しますが、それは俳句としてではなく、特殊な短詩としての評価です。

では、なぜ五七五が最短定型になりえたか。これはあくまでも僕の仮説ですが、五に始まって七に行き、もう一度、五に帰る。このシンメトリ性にあるのではないか。これに対して、短歌は五七五七七で、内側に収斂しないで外に開いている。そこが短歌と俳句の違いの一つだと思います。俳句と短歌を併作していると二つの詩型の違いを聞かれることがしばしばあります。五七五で「別

れてやる！」というのが俳句なら、下の句七七で「……でも別れられない」というのが短歌、だから俳句は決断の詩型、これに対して短歌は未練の詩型、と答えることにしています。

俳句が五七五というシンメトリ性によって日本語の最短、最終詩型として成立するわけですが、そこには二つの必須条件があります。一つは内容で、それは季語、もう一つは形式で、切字です。季語は「季節の言葉」と言えば、それまでですが、すべての生命は基本的に季節とともにあるわけだから、これは「いのちの言葉」と言い換えてもいいと思います。このいのちの言葉を入れることによって、五七五という最短の詩型が一つの生命体となり、詩として成立するというのが、僕の俳句に対する基本的な考えかたです。

そのいのちの言葉を生かすのが切字です。切字とは「沈黙または空間を呼び込む装置」と考えてはどうでしょうか。切字は、第一義的には俳諧連歌、具体的には歌仙三十六句の第一句である発句と、第二句の脇句以下、第三十六句の挙句までを切る仕掛けです。しかし同時に、五七五の中に切れ目を入れ、沈黙を呼び込むことで、五七五という最終の最短定型を宇宙大に広げる仕掛けでもある。代表的なものは「や・かな・けり」ですが、いろは「四十八字皆切字」と芭蕉が言っています。つまり、切字の意識、切字の工夫はすでに芭蕉において明確に存在していたということになりました。

歌のその後

さて、和歌と恋の関係はどうなったのでしょうか。和歌が『新古今集』で頂点に達して力を失った後も、建前上は和歌がわが国の文芸、特に詩歌の中心であり続けました。特に江戸時代、国学が隆昌してからは、国学を古く「歌学」と言うとおろ、歌は極めて重視されます。しかし、その内容である恋は最終的には日本という国体に向かう、つま

り国体への恋になるわけです。本来の季歌も恋歌も弱体化します。

その反省の上に、明治維新の後、与謝野鉄幹率いる新詩社、特に与謝野晶子の歌は、『みだれ髪』に関する限りですが、恋を通り越して過激なまでの性愛の歌になります。正岡子規に始まる根岸派、アララギ派の歌は、極端な自然詠重視となります。しかし、その後百年、結局、現在まで残っている歌は様々な逆境の中で恋の不可能性を生きた歌人の作ではないかと僕は思っています。石川啄木、長塚節、斎藤茂吉、釈迦空、塚本邦雄、葛原妙子、山中智恵子、春日井建、みなそういうことが言えるのではないのでしょうか。

3・11大災のときの詩歌の対応

もう一度繰り返しますと、日本の詩歌はどんどん短くなり、その究極、最終の形が俳句の五七五です。ところがその後、ヨーロッパ、アメリカ世界から、ポエトリーというものが入ってきて、その日本語化したものが新体詩と呼ばれたため、俳句は短歌とともに旧体詩と認識されることになった。しかし、決してそうではないということが、2011年の3月11日、いわゆる3・11大災によって遅まきながら見えてきたと僕は思っています。

この3・11大災ですが、最初は巨大な天災の地震と、それに伴う津波だと一般に思われていたのが、原子力発電所事故を伴い、これが天災というより人災で、これのほうが地震や津波の天災よりはるかに深刻だと分かってきました。

詩の雑誌でも何度か緊急特集が組まれ、僕も作品の依頼を受けて何度か書きました。しかし、どうにかまとめてみるものの、自分自身で手応えがない。活字になると目を覆いたくなる。自分の作品に対してだけではなく同じ雑誌に載っている他人の作品に対しても、もう一つ、ぴんと来ない。短歌の雑誌でも同様な特集がありましたが、これもやはりもう一つ、ぴんと来ないのです。

これは変だなと僕は思いました。と申しますのは、それからちょうど十年前、二十一世紀の最初の年、2001年9月11日、いわゆる9・11のアメリカの同時多発テロのとき、やはり詩が事態との対応に手をこまねいていたにもかかわらず、短歌が実に生き生きと対応していた。それが3・11ではどうも対応できていない。

そんな中で、俳句だけがしっかりと対応できていることがだんだん見えてきた。特に直接の被災地に住む人の俳句、盛岡の小原啄葉さん、釜石の照井翠さん、多賀城の高野ムツオさん、土浦の関悦史さんなど。特に高野さんの俳句は2013年に『萬の翹』という句集にまとめられ、静かな強い説得力を持って迫ってきました。

短歌でも同じころ、やはり被災地の仙台に住む佐藤通雅さんが『昔話』^{むがすこ}という歌集をまとめられました。3・11大災をテーマにした歌集で最良のものだと思われましても、それでも高野さんの『萬の翹』に比べるともう一つ、生な感じと申しますか、詩歌というところまで昇華しきれていないのではないかという印象を、僕個人としては受けました。これは佐藤さんのせいではなく、短歌という定型のせいではないか。俳句に比べて短歌は下の句の長い分だけ、そして、七七と開いている分だけしゃべりすぎる。十年前の9・11では被災地との距離があったため、いきいきと機能したのが、身近な深刻な事態に際して詩としての力を持たなくなる。

そのことは今年、小島ゆかりさんの歌集『泥と青葉』が出て、一層見えて来た感じがします。『泥と若葉』にも震災関連の歌があって、これは『昔話』の歌より詩歌としての昇華度が高いと思われるなりません。

それは距離の問題ではないか。俳句は切字によって自らの定型の中に空間を含むので、至近の、緊急の事態に対応できるが、切字がなく、外に開いている短歌は同じ事態に対応が難しい。小島さんは西東京市在住で、被災地との距離が近過ぎず、

遠過ぎない。被災地に住んでおられる佐藤さんの『昔話』より小島さんの『泥と青葉』中の震災関連の歌のほうが詩歌として成立しえているのは、一つにはこの距離の所為ではないか。

先に、俳句の形式上の特徴は「切字」と言いましたが、では短歌の形式上の特徴は何か。これは「調べ」ではないかと思うのです。もちろん二句切れ、三句切れなどがありますが、俳句の切字のように切れず、調べとして続くし、外部からも切れない。だから、作者と歌材（歌のモチーフ）との間の距離が、俳句の場合以上に必要となってくるのではないのでしょうか。

俳句は死者文芸

もう一つ加えて言えば、僕は特にこのことを言いたいのですが、死者との関係があると思うのです。俳句の内容的特徴である季語は、過去、歴代の死者たちから順繰りに手渡されてきたものです。その最も先鋭な例に忌日題があります。芭蕉忌、蕪村忌、西行忌、人麻呂忌、あるいは世阿弥忌や光悦忌、頼朝忌、信長忌という、俳句や短歌以外の人を含めた忌日をいう季語です。

もちろん、短歌にも人の死を悼む挽歌というものがあります。しかし、挽歌は一回限りです。俳句の忌日はくりかえし悼むことができます。忌日題に限らず、季題自体、一句作るごとにそれを手渡してくれた代々の死者とかかわることになる。僕はそのことを踏まえて、俳句を死者文芸ととらえています。死者文芸でもう一つ思うのは、能、謡曲です。演じるたびに死者とかかわる演劇であり文芸です。

実は短歌にも死者とかかわる契機はあった。それは本歌取りで、過去の作者の歌のある部分を生命の形代として戴いて新しく自分の歌を作ることです。ところが、近代短歌は本歌取りを旧弊として惜しげもなく捨てて生者文芸になった。そのため、死者とは一回ずつ新たにとかかわらなければな

らなくなりました。沈黙も一回ごとに入れなければならぬ。その上、このところの短歌はどんどん口語化して、文語という死者との最後の関わりまで進んで捨て去ろうとしている。結果として伝統の詩歌である短歌が、新来の詩歌である新体詩、これが自由詩になりますが、それと同レベルに立ってしまった、生者文芸になってしまった、ということではないのでしょうか。

発語するまえにできるだけ沈黙すること

さて、どうすればいいか。僕の場合どうしているかということですが、「発語をする前にできるだけ沈黙すること」ではないかと思えます。

もうすこし具体的に言うと、詠いたい気持ち、書きたい気持ちも起こらないのに書くようなことは可能な限りしない。詠いたい気持ち、書きたい気持ちが起こっても、我慢して、我慢して、我慢の限界に達したとき、初めて書き始める。すると、最初に出てきた一語は沈黙の力を帯びて、次の言葉を読んでくれる。その次の言葉がまた次の言葉を読んでくれる。こうして、長い時間をかけて一篇が出来る。

僕は二十代の終わりから十五年も続いた長い苦しいスランプを抜け出して以来、こういう作り方をしてきました。それはひょっとしたら、そのスランプという長い沈黙から学んだことかもしれません。そして、そのことを今回の3・11から続く沈黙せざるをえない非常事態において再確認させられたということです。もちろん、これは詩の場合の話で、短歌や俳句では結社誌の毎月の締切ということがあり、悩ましい問題だということもよくわかります。

しかしその制約の中でも、可能な限り書く必然性に自分を持っていくことが必要ではないでしょうか。その意味では一晩じゅう苦しんで、一首か二首を生み出した葛原妙子や、締切が近づくとびにノルマの数句を得るため独り吟行を繰り返した

飯島晴子の例を、大切にしたいと思います。

特に俳句で多作多捨ということが言われますが、これも沈黙の中での作業であって、これもまた沈黙に学ぶこと、さらにいえば死者に学ぶことの一変形ではないか。言語表現、ことに句作、歌作を含めて詩作においては、いかに書くかと同時にいかに書かないかも重要だということを敢えて提言して、この貧しい講演を終えたく存じます。

付記 小文は2014年7月6日、お茶の水女子大学におけるシンポジウム「越境する文学の諸相～ことばを越える・ジャンルを越える～」における発表ののち、さらに考察を進め、同年7月19日神戸の日本歌人集会「俳句―近くて遠い詩型」で講演した内容を、KADOKAWA発行の月刊誌「俳句」同年10月号特集「「平明」と「沈黙」の力」掲載のために改稿。初発表のかたちによらず、敢えて再考・改稿のかたちで転載するものである。